

『その一瞬先の永遠を』

著：榊花月

ill：冬乃郁也

広央がここを訪れたのは、もちろん真野の将来設計に耳を傾けるためではない。

しょっちゅう同伴する、と言っていた——鳴沢ことガイが、常連客とここで呑んでから出勤すると聞いたから、会えるかもしれないと足を運んだ。

店に先客がないのを見た時は、すくなくならず拍子抜けした。あてが外れたという思いがしたが、鳴沢には広央を待つ義務なんかない。同伴するかどうかは、鳴沢か、あるいはあの生意気そうな若い男しだいなのだろう。

百パーセントの確率じゃないことはわかっていたのに、いないと知ってがっかりするのは筋違いだ。しかし現に、がらんとした店で時間をもてあましている。

ドアが開いた。広央は即座に顔をそちらに向けた。入ってきたのは、若いカップルだった。いらっしゃいませ、と残っているほうのバーテンが声をかける。

「こんちー。今日はマスターいないの？」

彼女のほうが、大きく腕を振りながら訊(たず)ねた。

「残念。今日は、お休みをいただいております」

「ええっ、ショックー。マスターの顔見に来たのに」

女の子はあからさまに残念がり、「おい、俺の立場を考えろ」と彼氏に小突かかれている。

「俺の立場もないですね」

バーテンも、静かな口調でつつこんだ。

常連なのだろう。ひとしきり言葉を交わすと、彼らはテーブル席へ向かう。

動機が不純だ、と彼氏に指摘されていた彼女と自分は、ある意味同類だなと思った。この店の雰囲気や酒の味が気に入ったわけではない——もちろん、気に入らなかったというのではなく、いい店だと好感を抱いたが、ここに鳴沢が出入りしていなかったとしたら、再訪しようとは考えなかつたらう。

つまり、動機が不純なのだ。ここに来れば会えるかもしれない。そういう期待感を、下心という。電車の中で見かけるだけで、幸せな気持ちになれた。それでいいと思っていたのに、どんどん欲張りになっていく。

「高菜チャーハンになります」

やがて厨房から真野が出てくると、ほかほか湯気の立つプレートを広央の前に置いた。広央はもう一杯ジンバックを追加オーダーすると、カトラリーを手にした。

「——旨(うまい)」

「マジっすか？ やったー。家でも練習したりして、いろいろ工夫したんですよね。ちりめんじゃこは、先にカリカリに焼いておいたほうが匂いも歯触りもいいし、あとちょっとだけニンニクを……」

もうしわけない限りだが、真野の言葉を広央は途中から聞いていなかった。ドアが開き、おぼえのある長身がそこに見えたからだ。

「あ、いらっしゃい。いつもどうもありがとうございます——」

鳴沢は、一人ではなかった。先に立って入ってきたのは、このあいだと同じ男だった。スプーンの動きが止まる。礼儀も忘れ、広央はしげしげと二人を見る。

若い男が、視線に気づいたようにこちらを見た。すぐにキツとした顔になり、睨(にら)んでくる。

睨まれてばかりだ。視線を逸らし、掬(すく)ったチャーハンを口に運ぶ。おそるおそる再度顔を上げると、二人の姿はもうなかった。

真野ではないバーテンがカウンターを出ていく。いらっしやいませ、ああ、元気だった？ というやりとりが背後から聞こえた。ソルティドッグ、と男の声。ガイは？ —— 鳴沢の返事は、BGMに掻き消されて耳に届かなかった。

少しずつ客が増え、一時を回る頃にはカウンターも埋まる。広央は背中に意識を集中させていたが、二人のやりとりは聞こえなかった。

自分は何にをやっているのだろう。ふと虚(むなし)さが過(よぎ)った。相手は自分になどなんの興味もないのだろうし、電車の中で交わした言葉にもおそらく意味はない。口止めをした時にはそれなりに真剣だったかもしれないが、それとて鳴沢自身を守るためのものだ。

帰ろうかな、と思いはじめた時、背後に人の気配がした。

「よう」

鳴沢——いや、今はガイなのだろうが——の、ひとを食ったような顔が見下ろしている。

「そんなに俺のことが気になる？」

カウンターに反対向きに寄りかかり、腕を組んだ。

「え？ ——いや、あの」

「気持ちはわかるけどさ。興味があったら店に来てよ」

週末の草野球にでも誘うみたいに軽い口調で言い、ジャケットのポケットに手をつっこむ。

渡された名刺を見、広央は視線を鳴沢に戻した。

「Enigma」の店名のほかには、「ガイ」と携帯電話のものらしい番号が並んでいるだけの簡単な名刺だったが、地厚の紙はシルバーで、しかも印刷面には細かな模様がレリーフのように浮きあがっている。広央はまだ名刺を作ったこともなく、また受け取った経験もすくなかったが、特別製だとだけはわかった。

「……」

「なにやってんだよ、ガイ」

その時、不機嫌そうな声が割って入り、広央の視界から鳴沢を隠すように連れの男が立ちはだかった。

「ん？ 営業活動」

相手の不興などものともしない様子で、鳴沢ことガイは肩をすくめる。

「営業って……無理だろ、彼には。入り口で引き返すのが関の山」

彼は、厭(いや)な目で広央を見た。

「そう決めつけたものでもないぞ、隆(りゅう)矢(や)」

鳴沢は笑ったが、「そろそろ行くか」と、べつにここで広央にこだわる理由はないというふうには背中を浮かせる。

「……もう。あんまりいいかげんだったら、もうボトルなんか入れてやらないからな」

若い、顔立ちのいい男だ。もしかすると二十歳にもなっていないのかもしれない。だが、身なりからして相当裕福なことは窺えた。態度もそれに比例して、年上であろう相手にも威圧的だ。

「なんなんですかね、あれ」

愛想よく出口まで客を誘導した真野だったが、戻ってくると気分を害されたふうに言った。

「偉そうに。無理って、そりゃ無理っすよね。違う意味で」

共感を誘うような目を向けられ、ようやく真野が自分をフォローしてくれているのだとわかった。「無理」という意味も。気にしていないというしるしに、広央はうなずいてふたたびチャーハンに戻る。

「そりゃあ、同じ会員制クラブでも、きれいなおねーさんのいる店だったら無理してでも行くけどさ」

……やはり、そういう認識なのだな、と思った。真野は自分の性向を知るよしもないのだから、それであたりまえだ。そして真野も、健全な側にいる男なのだろう。

そういう意味では、無理じゃないんだけどな。胸のうちでつぶやいたけれど、声に出さない時点で誰にも理解を求めるものではない。世の中、そうじゃない男のほうが大多数なのだ。

いまさら辛くもないが、こうして折々に自分の性向が一般的なものではないと知らされるのはすこしめんどくさい。

それより、唆すようにこちらを見た、鳴沢の顔のほうが心の大部分を占めていた。

おどけた顔つき、軽い口調。

電車の中で見かける時とは、すこし違う。教師なのだから、あたりまえか。どちらが本来の鳴沢なのだろう。そして、どうして正業のほかに、ホストの仕事をしているのか。

知りたいことは山ほどあった。だが、自分がそれを知る機会はないんだろうともわかっている。名刺はもらったけれど、それはただの、ホストの営業なのだろうし、客として店に行ったところで、プライベートな部分に踏みこんでいいはずもない。

いや、ほんとうにそうなのか？

無理だろ、という隆矢の声が耳奥にこだました。広央と彼らを、明確に隔てる境界線。「Enigma」の客になれば、自分もあちら側に行けるのだろうか。

本文 p43～49 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>